香川教育

発行所
高松市田村町1033-3
TEL(087)867-4797
FAX(087)867-6446
kakyoso@kakyoso.com
香川県教職員組合
定価 1部50円　1月100円
（組合員の購読料は組合費に含む）

香教組ホームページ
http://kakyoso.com/

いつもとは違う教育のつどい

みんなで未来をひらく教育を語るつどい（後編）

思想家・武道家、道場兼寺子屋の凱風館館長・神戸女学院大学名誉教授

（前号の続き）

しかし、それはなかなかできない。子どもを一番傷つけるのは査定をすることだが、今の学校教育は査定抜きでは成立しない。結局は、査定するのは一個の単一の物差しをあてがって、何十人かの子どもたちに順番をつける。その部分だけは量的な差があって、後は同じだということを前提にしている。それは、子どもたちの持っている奥行きの違い、深み、厚み、そういうものを全て無視してのこと。単に高く査定したから、低く査定したからということで（子どもは）傷つく。慢心する以上に、一つのことにぎゅっと詰め込んで、今から測りますということが子どもを傷つける。生き物としての子どもたちの柔らかいところに深い傷を残してしまう。なのでできるだけ査定をしない。「学校に来てくれるだけでいいよ」と子どもたちに対しては、「これだけのことを教えるから、教えたことを習得して試験をするから、そこそこの点を取れ」というような、そこに力点を置いてはいけない。どうやったら学びが起動するか。そこにリソースを優先的に分配するべき。学ぶというのは自分の頭の中を占めているいろいろな先入観を脇に置いて取り除いて、この人の話をとりあえず、あれこれと評価しないで、即断しないで黙って聞いてみよう。自分の自我を脇に置いて、評価を下さずに少し時間を伸ばしてとりあえず話を聴く。人の話をとりあえず聴くことが学びだ。それができたらOK。何か言われた瞬間に即答で「それは違うよ」とか、「俺はそれ関係ない」とか、そのようなことは頭に輪っかが詰まっている状態。輪っかが詰まっていて新しいものが一切入ってこなくなっている。その自我を一回解除して、頭を一回緩めて、しばし相手の話を黙って聴く。それは要するに、自分の頭の中で自我の部分があって、俺の考えとは別に人の考えがあり、複数の仮説が並列で処理できるということが知力。これは2つできたら今度は3つ走らせる。4つ走らせる。いろいろなことについて即断即決しないで、「なるほどそういう考え方もできるのか」と、いくつかの考え方について並べていけるのが知性の力。

「コロナ危機からみえる」新自由主義の問題と教育の課題

子どもに競争をさせろという世間からのプレッシャーがある

競争させろと、子どもを緩い環境に置いておくと、将来的にもっと激烈な競争になったときに負けるから、子どものうちから競争慣れさせておけという風潮がある。それは全く違っていると思う。子どもはやはり温室で育てるべき。風雨にさらされている時期がいずれくると思うが、それはできるだけ先でいいと思う。子供の時から世間の荒波に晒すことはない。僕は学校は温室という主義だ。温室の中でないと弱い植物なので、芽を出して花を咲かせるまでには守ってあげて、じょうろで水を上げて見守ってあげることが絶対に必要であって、小さい時から世間の波に晒されるとか、世間の激しい競争や偏見、暴力的なものをそれが現実なのだから、早い時期から現実に適応するべきだというのは全く間違っている。

そもそもイエズス会が、最初に学校を作った時の理由は、親の子殺しから守るためだった。ヨーロッパでは伝統的に、非常に子どもの人権が無きに等しかった。親は、子どもを実際に処罰したり、殺したりということが多発した。それで、イエズス会が神の前では親も子も平等であると画期的なことを言って、子どもたちを親から隔離して、親の暴力から子どもを守るために学校を作った。イエズス会が学校を作った初発の動機が、親の暴力というある意味リアルなもの。親自身は現実世界に生きていて、そこでのルールを自分自身内面化していて、強いものに弱いものは従うべきであるということで、子どもは弱いから自分自身に従わせる、文句があったら打擲する。場合によっては殺してしまう。それに対して、「それとは違う価値観があるよ」と対抗して作ったのが学校。近代における学校は親の暴力から子どもを守る。親の暴力は言い換えると社会の常識から子どもを守る。弱肉強食だった常識から「それは違うよ」と、子どもたちを簡単に肉にしては困ると、しっかり生きる力がつくまでは保護する。今の学校の子どもたちを保護するということが、まず、子どもたちを社会の荒波から守るということが、学校の最も優先的な課題だということがわかっていないのではないか。

コロナによって遅れた学習指導要領を取り戻そうと授業の詰め込みが行われているが

全く間違っている。今うちの甥っ子が小学校1年生で6時間やっていると聞いて、それはただ、学校嫌い、勉強嫌いの子どもを作るだけだと思う。学校に来て学んでほしいのは、子どもたちに勉強をする習慣がないので、「学校に来るのは楽しい」ということ。最初に刷り込むこと。

小学校の低学年の段階で、学習指導要領に決まっているからやらないといけないなどと言って、教師自身が義務感でいやいや教えている。そんなところに行って、学校が楽しいと子どもにどうやって刷り込めばいいのか。本当にナンセンスだ。

このような状況なのだから、「そのうちなんとかなるだろう」、「高校を出るまでに12年間あるのだから、どこかで

2020.9.15日号　発行の定日 毎月15日、30日　香川教育　昭和24年3月14日 第三種郵便物認可　2096号

帳尻を合わせてよ」ぐらいでいい。大体12年間丸々勉強する子どもなどいない。ある時期に全く勉強しなくなることは必ずあること。12年間のうち、2・3年くらい、全く勉強しない時期が全員どこかの段階であることを前提にして、12年間の学習指導要領がある。12年間真面目に勉強しないと終わらないわけではない。途中で2年くらい全く勉強しない時期があっても、必ずキャッチアップできるように作ってある。だから、小学校でやったことを中学校でやって、また高校でやってということがあるが、いつ勉強しようかと思っても、間に合うようにしてある。なので、そのつもりでいてコロナで半年くらい勉強しなかったと言っても、オンラインで少しはしているので、全くやっていないわけではないから、いいのではないか。「今回の遅れはそのうち取り戻せばいい」「なんてことはないよ」と、そのくらいの気持ちで教師は教壇に立っていないと子どもが気の毒だ。

過去にも戦争の時に疎開した。その後、学校が再開したのはいつだろうか。その間、半年から1年間くらい勉強らしい勉強をしていない。では、その人たちが学力が低いかといえば、そのようなことは全然ない。何時間やったからというのは関係ない。適当でいい。やらなくてもなんとかなる。どうして学習指導要領通りにやるのか。それは一つの目安。これくらいのことをしておくと最終的に学ぶ構えができるかどうかが問題で、何を教えるかはどうだっていい。学ぶというマインドができればいい。こんなことをやっていたら学校嫌い、勉強嫌いを作るだけ。今年、こんなことをして、コロナパンデミックで夏休みもなく、一年生から6時間。小学校低学年から7時間やらされたりしたら、この子たちの学年は劇的に学力が下がる。学校嫌い、勉強嫌いになるから、どうやってこの後、この子たちを学びに導くのか。

新価値観と感動を消費的に扱う
自由主義的な空気の関連性について

イメージ操作がコマーシャル的になっていて、それに騙される子どもも多い。「勇気をもらった」などの言葉から感じられる感情がパッケージになって行き交っている。ある時期から「勇気をもらった」、「感動をありがとう」、感動がパッケージされて飛び交っていて、ある番組を見ていると、そこから胸の中に飛び込んでくるのだろうが、

多分感情とはそういうものだと信じている人がたくさんいる。しかし、感情とはそのようなものではなく、脳のしわのようなもので、どんどん分節し、どんどん複雑怪奇になっていくもの。感情教育というフローベルの著書があるが、感情とは複雑化して多様なるもので、子どものうちはシンプルだがだんだんわかりにくくなる。感情の複雑化が感情教育なのだが、今の日本で行われているのは、感情の単純化だ。

表現もものすごくシンプルになってきて、複雑な感情を複雑な発生法で、複雑な身体運用で、それを訓練して深めていくということを全然していないのではないか。いろいろな学校教育の弊害もあると思うが、「あなたが思っていることを400字以内でクリアカットに述べなさい」というようなことをずっと子どもの頃から訓練している。複雑な気持ちやわかりにくい曖昧なものを曖昧なまま言葉にしていくことが許されない。曖昧な感情をシンプルなものにして査定しやすい状態で提出することを国語教育を通じて強要している。その結果があると思う。

感情はどんどん複雑化して深みと奥行きを増していくので、自分の感情を人に伝えようと思ったら、今度は言葉を鍛えていかなければならない。そのような本当は複雑化していく成熟のスパイラルがあるが、その考え方を今の学校教育はしていない。むしろ単純になること、どんなことでもクリアカットに一言でスパッと200字で表現するようなクリアカットな言葉は危険。

先ほども自我と言ったが、自我は自分の喋った言葉でできている。自分が喋った言葉は自分の自我の檻となっている。自分が語って断言した言葉によって編まれている。その中に閉じ込められている。普段から曖昧なことを言っている言葉を探しながら紡いでいって、そうすると自我の檻が緩いと外して人の話を聴くことができる。自我の檻が堅牢であると外せない。少しでも意見の違う人の話を聴くことができなくなる。しかし今の学校教育は自我の檻を緩めていくことを全然教育目標にしていないのではないか。逆に自我を強化していく方法。「個性を出せ」や、「言いたいことをはっきり言いなさい」と。言いたいことなどはっきりと言えないし、子どもにそれを強要してはいけない。子どもも無理して何か言ってしまう。大体それは大人から聞いたことをただ模倣するだけ。しかし人間は人から聞いた言葉でも、自分が一回口に出すと、それは自分の意見になる。自分の意見から離れられない。なので、迂闊なことを子どもに言わせてはいけない。小学生が「先生、結局人生は色と欲だ」と言ったら、それはまずいと思わなくてはいけない。それは誰かの口真似だが、それを言った瞬間にその子にとって自分の意見となる。揺るぎもしない自分の意見でそこから出られなくなってしまう。なので、子どもに迂闊なことを言わせてはいけない。

（おわり）

2020年を迎えるや否や、新型コロナウイルス感染症というこれまで経験したことのない事態に直面しました。全国一斉休校は、3カ月に渡り、私たちに「学校とは」とその存在価値を問いかけ、登校できにくい子どもたちが、「学校に行かなくてもよいことで気が楽になった」と語りました。学校は休校でも、大手学習塾は開いており、学力の格差が心配されています。そもそも「塾で培う学力とは」との問いも出てきました。

教育のICT化が急速に進もうとしています。スクールGIGA構想を推進していた文科省としては、ある意味願ったりかなったりだったかもしれません。

常にマスクの着用、前向き・無言の給食、ことあるごとの消毒、ソーシャルディスタンスと新しい生活スタイルといわれるこれらは、子どもたちにとってはとても窮屈です。

大人の会議は、その多くがオンライン会議になり、移動しなくても会議ができることを実感しました。しかし、参加者の生の反応が分からないなどの問題点も指摘され、改めて、人と人との温もりのある関係や体温が伝わる距離が人間関係づくりに大切であることも見えてきました。

そんな中で行われた2020年度の教育のつどいは、全体会、分科会ともオンラインでおこなわれました。教職員の「学びたい」という思いが、オンライン型教育のつどいを成功させました。

全体会の記念講演は、香教組事務所でみんなで見た人、自宅で見た人さまざまでしたが、移動がなかった分、例年より多くの人が参加することができました。

内田　樹氏の話は、極論のようにも聞こえますが、輪っかを外して考えると、私たちがどれだけ固定概念にとらわれているかがわかります。すぐにはどうにもならなくても、角度を変えてみる、そしてはなしあってみることは大切だと思います。

小黒板

短い夏休み

2学期が始まった。2020年度は、コロナ禍のため多くの自治体で夏休みを短縮した▼宿題を少なくするなどの配慮をした学校もあったようだが、子どもたちは「あっという間に終わった」と口々に話していた。短い夏休みを喜んだのは保護者だろうか▼教職員も、休んだ気がしないという。実質、夏季特休5日がやっとか。「1学期の疲れがとれていない」という声も聞く▼2学期が始まり、1週間程度14時頃下校の学校もあったが、始業式の翌日から7時間授業をした学校もある▼猛暑が襲い、新型コロナ感染症対策に加え、熱中症対策にも追われた▼14時頃の下校の時、「ずっとこうだったら、教材研究ができて早く帰れる」とも▼さて、子どもの立場になって考えてみよう。大人は、休校が続いたので、夏休みの短縮で取り戻すと簡単に決めてしまった▼もし、これが大人の有給を管理職がトップダウンで取り消したら、労基法違反だ▼夏休みは子どもの有給ではないか。年中行事として、子どもの生活の中に位置づいている。夏休みを過ごして「やっぱり学校っていいな」と2学期が始まる▼子どもの有給を大人が勝手に取り上げてはいけない。この付けは、ずっと後で子どもが背負うことになる▼その時、私たちは子どものそばにはいない。見ることはない。恐ろしいことだ。